

トルコ～ドイツ 4カ国を巡って



株式会社復建技術コンサルタント
宅地災害復興支援プロジェクト室

佐藤 真吾
SATO Shingo

はじめに

私は、平成26年度 WAVE・JCCA 欧州インフラ事情調査に参加させて頂いた。これは、平成25年9月19日に行われた、平成25年度 建設コンサルタント業務・研究発表会において、防災・減災の部で優秀賞を賜り、その副賞によるものである。



写真1 諸国民戦争記念碑



写真2 炭鉱跡地を再開発した人造湖

欧州インフラ事情調査は、平成26年6月12日から同23日までの12日間にわたり、トルコ、イタリア、スイス、ドイツの4カ国を視察した。調査団は中村英夫団長（東京都市大学名誉総長）を筆頭に、28名（うちJCCA18名）プラス添乗員1名の総勢29名である。各メンバーは事前にそれぞれ役割分担を決め、訪問都市の概要、河川・地域分野、道路・公共交通分野、都市計画分野、環境・エネルギー分野、ボスポラス海峡のいずれかを担当した。また、訪問都市は、イスタンブール、ナポリ、ローマ、ツェルマット、フュッセン、ライプツィヒ、ドレスデン、エアフルトの計8都市である。私はドイツ国ライプツィヒの都市概要を担当し、調査団の一員として視察に臨んだ。以下、ライプツィヒの概要とともに、私が今回の視察で印象深く感じたことを幾つか述べさせていただく。

ライプツィヒの概要

ライプツィヒは、ヨーロッパ大陸の中央に商都として発達し、時代ごとに様々な文化が開花した都市である。特に、音楽では作曲家バッハ、メンデルスゾーン、シューマン、ワーグナー、瀧廉太郎らゆかりの街として国際的に知られてきた。また、ドイツで2番目に古いライプツィヒ大学では文豪ゲーテ、哲学者ニーチェ、日本近代文学

の巨峰・森鷗外、ドイツ首相メルケルらが学び、さらには世界最古の日刊紙発行をはじめとする書籍出版、ヨーロッパの天下を分けた諸国民戦争（ライプツィヒの戦い；写真1）、世界初となる見本市（メッセ）の開催、当地で始まった東西ドイツ統一運動など、歴史の舞台としても有名な都市である。

一方、街づくりにおいて特筆すべき事項としては、炭鉱跡地の再開発が挙げられる。ライプツィヒ周辺にはたくさん湖が存在するが、これらは元炭鉱跡地を再開発したものである。かつての露天掘り炭鉱を生かして造られた湖沼地は、ウォータースポーツや水遊びに素晴らしい環境となっている（写真2）。数年後には、枝分かれした運河で23の湖がつながって総水面積175km²となり、ライプツィヒ近郊は巨大な湖沼地帯となる計画である。

一方通行逆走防止施設（トルコ イスタンブール）

写真3は、イスタンブール市内で見かけた一方通行逆走防止施設である。一方通行道路を逆走すると、タイヤに鉄の突起が突き刺さりパンクする仕組みになっている。違反者を完全に無くするために物理的に逆走を阻止する方法としては非常に有効である。日本ではこのよ



写真3 一方通行逆走防止施設



写真4 アマルフィ（世界遺産）



写真5 温暖化により解け行く氷河



写真6 橋の上に形成された街並み

うな荒療治的な対策は極めて難しいと思われるが、トルコでは実際に適用されていた。

アマルフィ（イタリア）

アマルフィは、周囲を断崖絶壁の海岸に囲まれ、断崖上に向かって形成された素晴らしい景色の街であり、ユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録されている（写真4）。妻にこの写真を見せたところ、素晴らしい景色だけでなく三陸海岸の景色と大して変わらないね！というつれない返事が返ってきた。岩手県の三陸海岸も世界に誇れる景色を有しており、震災復興のあり方を改めて考えさせられた。

解け行く氷河（スイス ゴルナーグラート）

生まれて初めて氷河を見た。広大な景色の一方で、氷河が解けているのを目の当たりにし、地球温暖化について改めて考えさせられた（写真5）。

クレーマー橋（ドイツ エアフルト）

船の上で生活する人はテレビで見たことがある

が、橋の上に街が形成されているのは初めて見た。写真6は1325年に建造された長さ120メートルのクレーマー橋である。「商人の橋」を意味するこの橋は、ゲーラ川に架かるヨーロッパ最長の木組み家屋付き石橋で、通行を目的とする橋としての機能はもちろん、住居や商店が軒を連ねるショッピングストリートの役割を果たしている。

おわりに

今回の視察では、初日から羽田空港発の飛行機が故障で飛ばず成田空港から別の航空会社の便に乗り換えたり、ローマではバスが故障して別のバスに乗り換えるなどのハプニングに見舞われたが、それも今思えば貴重な経験である。道中では、中村団長から視察地と東北の震災復興に絡めた街づくりのあり方や食事のマナーについて、丹羽隆子先生（東京海洋大学名誉教授）からは史跡の歴史的背景等についてご教示いただいた。また、WAVEやJCCAの関係者の皆さま、および今回同行させていただいた調査団の皆様のお陰で、大変有意義な体験をさせていただいた。ここに深く御礼申し上げます。